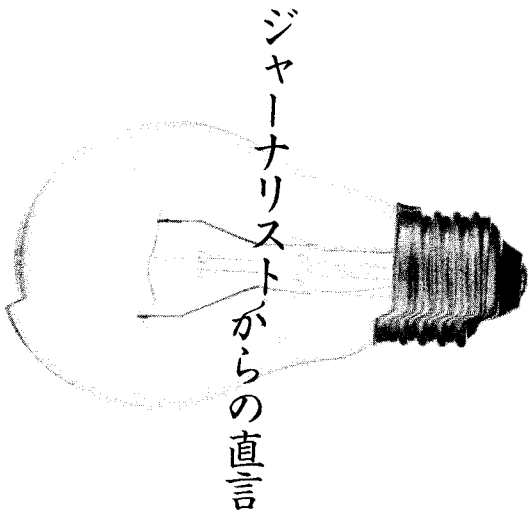
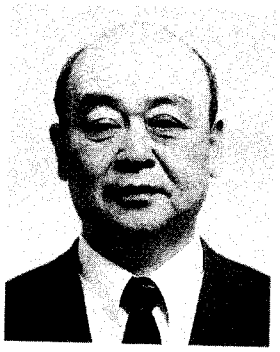


開業医の「視界」から何が見えるのか



毎日新聞大阪本社 論説委員

池田　知隆

「若い頃より、精神科医にとって、大学は保護室、公立病院は閉鎖病棟、民間病院は開放病棟、開業医が外来だとひそかに念じておりました」

今夏の「小説新潮」（８月号）の特集「医療小説最前線」を読んでいると、作家、帚木蓬生（ははきぎほうせい）さんが、３年前に精神科のクリニックを開業したとき、こんなあいさつ状を出したことを紹介している。

帚木さんは東京大学で仏文学を学び、放送局に勤めた後、精神科医になった異色の経歴の持ち主だ。「臓器農場」「閉鎖病棟」「安楽病棟」など医療の先端分野を視野に入れ、現代社会における医療の在り方を熱く語る作品で山本周五郎賞などを受賞している。最先端医療の現場を見つめてきたその帚木さんにして「外来である開業医こそが医師の醍醐味だ」と語り、「開業医になって視界がひらけた」とまで言っている。

「もし勤務医で終わっていたら精神科医の醍醐味を三分の一くらいしか知らずにいたんじゃないかと思うほどです」

*　　*

今年は黒澤明監督没後10年とあってNHKの衛星放送が全30作品を放映している。そのうち医療を主題に扱った映画は、「酔いどれ天使」（1948年）、「静かなる決闘」（1949年）、「赤ひげ」（1965年）の３作だ。先日放映された「静かなる決闘」は、終戦直後の町の産科医院を舞台にしたとても見ごたえのある傑作だった。

主人公・藤崎恭二（三船敏郎）は、戦争中の野戦病院で手術の際、指の傷口から梅毒に感染

するという不条理な運命に陥る。戦後、そのことをひた隠しにして婚約者を遠ざけ、献身的に医療行為に没頭するその姿は、息苦しいまでに美しく、医師の父親（志村喬）の凛として慈愛に満ちた表情も忘れがたい。だが、なによりもそんな開業医の父子を見つめることで、元娼婦だった看護婦が人間への信頼を獲得し、いきいきとした魅力を放っていくことに深い感動を覚えた。

黒澤監督は、山本周五郎原作「赤ひげ診療譚」を映画化した「赤ひげ」で、医療を取り巻く社会にも厳しい目を注いでいる。

「人間ほど尊く美しく、清らかでたのもしいものはない」

「だがまた人間ほど卑しく汚らわしく、愚鈍で邪悪で貪欲でいやらしいものもない」

尊く美しい人間と、卑しく汚らわしい人間の２種類がいるのではない。同じ人間の中にすべてが同居している。だから、人間とは愛おしい。山本周五郎も黒澤監督も、限りなく優しい眼差しを弱い者、貧しい人たちに注ぐだけではなく、医療が弱者救済の社会システムであることを忘れてはいない。幕府から経費を削られ、今でいう「公的医療費の削減」を迫る幕府に「赤ひげ」は激しく憤る。そこには政治への怒りがあり、無力感がある。人間への愛おしさがあり、人の矜持があり、涙がある。

＊　　＊

医療という現場では、人間の生きる姿、人間と社会の在り方がくっきりと見える。そのためか、医師から作家に転向した作家は、古くは森鴎外、近年では安部公房、北杜夫、加賀乙彦……と数え切れない。最近では、帚木さんのほか、「チーム・バチスタの栄光」を書いた海堂尊（かいどうたける）さん（外科医を経て病理専門医）のように、脳死移植や生命科学の発達に伴う医学それ自体が内包する危うい問題や、人類の根本的な課題をテーマにする作家が続いている。医療は日進月歩で発達しているが、そこには人間と人間のかかわりが基本にあることに変わりはない。

90年代以降、医療事故が続発し、医師や医療の在り方が厳しい批判にさらされた。だが、最近になってやっと、その背後に深刻な医師不足の問題があり、医療システムそのものが限界にきていることに市民的な理解が広がってきた。医療の崩壊が叫ばれる中で、ヒステリックな嘆きほど虚しいものはない。医療を、「不信」の増幅から「信頼」の回復に向けてどのような道筋をたてて考え、「絶望」から「希望」へとつなげていけばいいのか。それには、まずは現実を深く知ることから始めなければならない。

＊　　＊

帚木さんは、その雑誌で、45年の医師生活に別れを告げる老医師の心境をつづった短編「終診」を書き、こうも語っている。

「普通のお医者さんは、さほど劇的なドラマがあるわけじゃなく、たんたんと開業して消えていく、それが脈々と続いてゆく……。医師という職業集団はよく練れた集団じゃないかと思いますよ。日本においてこの集団がちゃんとしてさえいれば、今いろんな問題が起こっていますが、日本の医療が根本から崩れることはないんじゃないか。それほど献身的で地道な人が多いですよ、実際」

黒澤映画の数々のシーンを思い出しながら、そうなんだろうな、と思う。医療の原点は開業医の世界にあり、医療への信頼を回復するには開業医と患者が相互理解を深め、豊かな関係を結んでいくことこそが第一歩に違いない。

だが、やはり開業医としての「視界」から何が見えているのか、市民には伝わっていないのではないか。医師会という職業集団を通じて政治的な影響力を行使することも大切だが、社会に「開かれた業として医師」として市民にもっと直接語りかけてほしい。

「医療小説を書くとは、社会に対して責任を負うことであり、医療小説を読むとは、社会を知ることでもある。今こそ、誰にとっても医療小説が必要とされている時代だ」とその雑誌はうたっていた。現代医療の光と影を描いた優れた小説が次々と出ている。医療小説がもっと読まれ、それを話題に開業医と患者の語り合いが広がればいいなと思う。